



きし・たかし

1950年鳥取県生まれ。'69年、鳥取西高校卒業。'73年、関西大学卒業。'80年、名古屋市に(株)中部資格協会を設立。'87年、東京に(株)総合資格協会(現(株)総合資格)を設立、代表取締役役に就任。全国90余拠点に教室をもつ総合資格学院の学院長として、優秀な建築技術者育成のため陣頭指揮をとっている

建築士などの資格取得を支援する
建築界のさまざまな分野を牽引
業界の明日を担う若手、業界を目

これからの 建築

第85回

岸 隆司

株式会社総合資格
代表取締役

でなければならぬと考えています。岸―地域との密接なつながりが大きな特徴でもあるのです。渡邊―そうですね。また、東北にあることが重要なメリットだと思います。現在は社会も建築も多様化・高度化しているながら、地産地消など持続可能な社会に向けての視点も欠かせません。東北に在るといことは、その両方を見られる環境にあるのです。岸―たしかに東京の都市部では感じられないリアリティがあるのでしょうね。建築学部開設に至った経緯も教えてくださいいただけますか。石井―私どもの建築学科は50年以上工学部にあつたわけですが、ちょうど10年前に、今のままでよいのかということとを議論し始めました。そこでまず東北地方にあるほかの大学に伺って、各大学の特徴や魅力などについて、お話を聞かせていただいたんです。そのうえで自分たちの特徴を見直したときに、今まで当たり前だと思っていた仙台という立地環境や教育環境、多様な分野の専任教員がバランスよく在籍していることが強みになるのだと気づきました。それらの強みをさらに生かすために、工学だけには収まらない「建築学」という学問を明確化し、「建築学部」として示すことを考えたのです。



東北工業大学が卒業生の声などをまとめ、オリジナルで作成している企業紹介の冊子「企業図鑑」。写真は2016年に発刊のもの、その後増刊で発刊した3巻分。合計約200社が掲載されている。毎年学生に配付して、進路検討の参考として活用している

東日本大震災などもあり時間がかかってしまいましたが、ようやくそのときがきた、ということですね。岸―受験科目に国語が加えられたり、環境心理や生産・構法などの新たな研究室が増えたりといった変化があるのですが、枠組として大きな変更は何がありますか。石井―建築教育の基本は今までと変わりません。どこの大学も同じだと思いますが、建築の勉強はエンジニアリングからデザインまで幅が広いので、とても大変です。それらは基本としてしっかり教えます。それが学生のためでもありますから。一方で、学生それぞれの個性や特性に合わせて丁寧な指

総合資格の岸隆司社長が、
する企業のトップや建築家と対談し、
指す学生へのメッセージを発信します

これからの 人材

渡邊 浩文

東北工業大学 副学長

石井 敏

東北工業大学 建築学部長

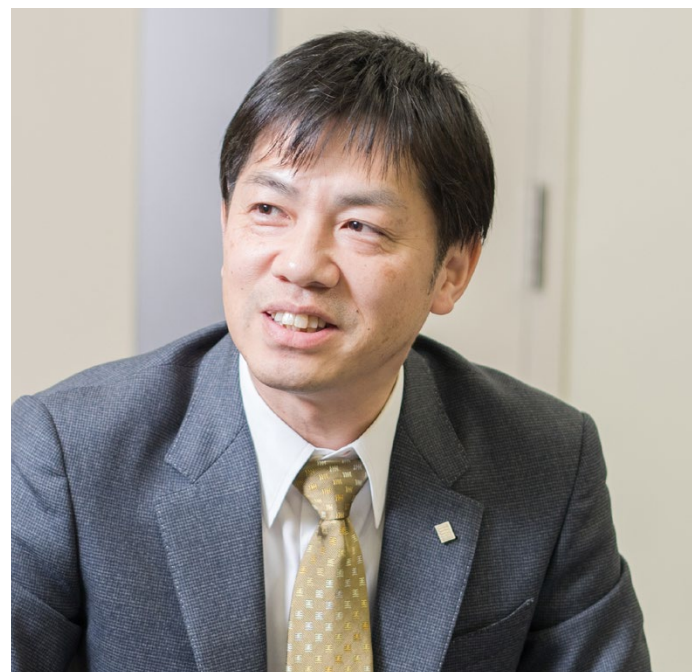
満を持しての「建築学部」のスタート
岸―東北工業大学さんは、これまでの工学部建築学科を、2020(令和2)年4月から建築学部として再スタートさせますね。それに伴って定員も増やすということ、少子化が進むなかで積極的な姿勢がとても印象的です。まず、沿革を教えてくださいいただけますか。渡邊―本学は1964(昭和39)年に、電子工学科と通信工学科の2学科体制でスタートしました。建学の精神は「東

北地方の産業界で指導的役割を担う高度な技術者を養成する」で、現在も「東北に位置する最も魅力ある工科大系私立大学」を目指しています。建築学科は、開学2年後の'66年に開設されました。建築学科の開設を文部省に申請した際には、当時の県知事、仙台市長、建築学会の会長ら錚々たる顔ぶれから「建築学科が必要」という添え書きを頂戴しており、それだけ地元の期待を担っていたことが分かります。そうした経緯からも、「地域に根差し、地域のニーズに応え、地域から信頼される大学」



わたなべ・ひろのり

1965年埼玉県生まれ。'88年早稲田大学理工学部建築学科卒業。'94年早稲田大学大学院博士後期課程修了。博士(工学)。早稲田大学理工学部建築学科助手などを経て、'98年東北工業大学工学部講師。2002年同助教授。'08年同教授。'12年同建築学科長。'14年同工学部長、工学科研究科長。'16年同副学長。専門は都市環境工学



いしい・さとし

1969年米国生まれ。静岡県出身。'95年東北大学大学院博士前期課程修了。'97年～2000年ヘルシンキ工科大学(現アアルト大学)大学院留学。'01年東京大学大学院博士後期課程修了。同年より東北工業大学工学部講師。'04年東北工業大学工学部助教授。'10年同教授。'14年同建築学科長(～現在)。'20年4月より同大学建築学部長。専門は建築計画・施設計画・環境行動研究

人物撮影=沼田孝彦



導していきたい。そのために、研究室をさらに充実させることで、より研究の選択肢が増えるようにしています。たとえば、デザインが得意ではない人でも、環境心理や構造設計に興味があるとか、違う方向に舵を切ることができます。建築という幅広い研究領域には、どんな学生でも必ず興味をもてる分野がある。そういう魅力をより高めていこうということです。

仙台には多様性が凝縮されている

岸 渡邊さんはどうして建築を目指されたのか、また現在も含めてどのようなことに興味をもち、どんな研究をなさっているのか教えてください。

渡邊 建築を選んだことに立派な理由はないのですが(笑)、学生時代に最初に興味をもったのは木村建一先生のソーラーハウスで、これからは環境の

視点が重要になるのだろうな、と思いました。その延長になるのかもしれないが、尾島俊雄先生の授業もおもしろかった。人工衛星のデータを使って都市を解析し、都市のスーパーロー化【※1】やヒートアイランド現象を調べるといった内容ですね。尾島研究室に入れていただいて研生活に入り、授業では環境工学を教えてください。今でも人工衛星で都市を見るように、どちらかというところから建物を見るようなアプローチが多いですね。

岸 渡邊さんは早稲田大学のご出身で、仙台とは特に縁はなかったと思うのですが、赴任してこられて仙台の印象はいかがですか。

渡邊 仙台はおもしろいですよ。先ほど申し上げたように人工衛星的な視点で見ると、仙台は100万人を超える大都市でありながら、その都市圏は10キロ四方程度です。10キロ四方は、東京でいえば山手線の内側ぐらいですからね。その範囲で、東に海があり西に山があつて、そのあいだに都心部があつて住宅地があつて田園地帯もある。ヒートアイランドの測定などをすると、海岸近くの涼しいところは盛岡と同じ気温で、逆に内陸のほうでは福岡より高いところもある。非常に多様なんです。岸 多様性が凝縮されているのです。

渡邊 へえ。日本は南北に細長いから気候も多様だ、とよく説明されますが、気候の多様性は緯度の差によるものだけではないことがよく分かります。岸 研究者としても興味深い土地ということですね。石井さんはなぜ建築に進まれたのですか。

石井 私もはっきりとした意志をもって建築の分野を選んだわけではありませんでした。ただ、縁があつて子どものころから来ていた仙台に魅せられて、東北大学の工学部(当時は2年進級時に学科を選ぶ工学部一括入試)に行きたいな、と(笑)。大学に入ってから、医療福祉施設の研究があるのを知り、それが建築を通して社会と人を見つめるものだと分かったときに「おもしろいな」と思いました。

岸 現在もその研究を続けられていて、研究者として目指すところはどんなことなのでしょう。

石井 日本の高齢者施設などの居住環境は、まだまだ貧しいと感じます。建築だけではどうにもならないことが多いのも事実です。そしてそれを変えるには、施設をつくる人、使う人だけではなく、一般の人たちにも広く建築や空間自体に興味をもってもらい、その価値を意識してもらおうことが重要です。空間は間違いなく人を豊かにする



と信じているので、研究を通じて、空間や建築の重要性を少しでも多くの人々に分かちてもらえる社会をつくりたいと思っています。

50年以上の歴史で育んだ地元企業との信頼関係

岸 お2人とも、非常に熱心に建築と向き合っていることがよく分かりました。いまの学生に、あるいはこれから建築学部に入ってくる人に望むのはどのようなことですか。

渡邊 工業大学ですから、きちんとした専門知識・能力を身につけることは大前提として、視野を広げてほしいと思います。ほかにどんな見方があるのか。そのために、部活動やボランティア活動、オープンコンペへの参加など、授業以外のことも積極的に取り組んでほしいですね。

石井 専門的な学びはもちろんです

が、社会できちんと生きていけるスキルを身につけてほしいと思います。コミュニケーション能力や時間・工程のマネジメント能力などいろいろありますが、建築はそれらを学びやすい学問です。たとえばコンペに友人と一緒に参加すれば、コミュニケーションは必須だし、もちろん締切に向けてやるべきことも分かってくる。また、設計という、よいデザインを提案することだけが評価の対象と考えられがちですが、実はそのプロセスが非常に大切なのです。教員側でも、最終成果だけでなく過程の評価も大切にしようと努力しているところです。

岸 数年前から『企業図鑑』をつくら



2020年に開催された第7回都市・まちづくりコンクールの様子。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、総合資格学院の教室を利用して全国13会場に分散して開催。出展者のプレゼンテーションと審査員の質疑応答はTV会議システムを通して行われた。制約が多い中でも、総合資格は学生が活躍する場を積極的に提供している

れていますね。これはとてもおもしろい取組みだと思えますが、少しご説明いただけますか。

石井 3年次の授業に「建築プロフェッショナル論」があり、これはすべての授業で、建築業界の各界で活躍する卒業生を招きオムニバス講義をしてもらうものです。その延長として学生との交流会などもやっているのですが、せっかく8千人を超える先輩たちが多くの企業にいるのだから、それぞれの企業について学生向けの企業紹介としてまとめられないかと、建築学科50周年を機に企画して冊子にしたのです。現在は卒業生がいない会社も含めて、200社以上が賛同して参加してくれています。

岸 先輩たちの仕事をするところを見ると、企業に対する親近感や安心感が違いますね。貴校と企業の信頼関係も伝わってきます。

渡邊 そうですね。先ほども申し上げたように、建築の勉強は幅が広がって大変です。私たちも厳しく指導するのですが、毎年一定の割合で4年間で卒業できない学生が出てきます。しかし、そうした学生も4年卒の学生と分け隔てなく、これらの企業が採用してくれる。なのでわれわれも「きちんと卒業すれば社会で受け入れてもらえ

るぞ」と励ますことができる。そういう意味でも、多くの企業に本当に感謝したいですね。

いずれ必要になる知識なので勉強は無駄にはならない

岸 最後に資格についてお聞きします。受験要件が変わって、20年から指定学科を卒業した時点で1級建築士試験を受けられるようになります。大学によっては、1級建築士試験の予備校化を懸念するところもあるのですが、貴校ではどのように捉えていますか。

石井 試験と直接結びつくエンジニアリング系の分野では、より試験を意識した教え方になるかもしれません。学生が授業に向き合う意識も変わるでしょう。ただ、具体的な対応方法としては定まっているというのが正直なところですね。資格を強く意識する学生も出てくるでしょうし、企業側からの要望もあるでしょう。そういったことを大学として無視するわけにはいかなくなります。学びの先にある資格取得をより一層意識させることは必要だと考えています。

岸 バランスは難しいところだと思います。ただ、建築の世界は資格の世界でもあつて、仕事をするうえで資格は欠かせないものです。なかでも1級建



築士資格はその最上位に位置するものですから、目指すべきものです。学生も忙しいとよくいわれますが、社会人のように会社に毎日長時間拘束されることはないでしょう。ですから、その時間を有効に使うことは将来を考えると大切なことではないでしょうか。1級建築士試験はほとんど難しくなっていて、半端な勉強の仕方では合格できません。社会に出れば必要になる知識なので、勉強が無駄になることもない。学生に向けた1級建築士試験対策として、私たちがどのようなお手伝いができるか考えているところです。ぜひ、情報交換をさせていただき、できることを協力させてほしいと思います。本日はありがとうございました。

※1 都市が発展拡大する際の現象で、郊外に向かって市街地が拡大する際に、無秩序な開発を行うこと